

千葉市美術館
アーティストプロジェクト
報告書

つくりかけラボ13
黒田菜月 | 野鳥観察日和

会期

2023年10月28日(土)
- 2024年1月28日(日)

アーティスト

黒田菜月

テーマ

コミュニケーションが
はじまる

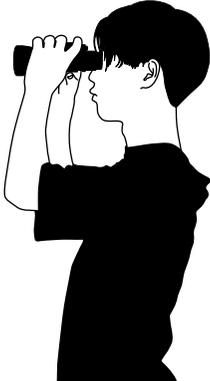
概要

「つくりかけラボ」とは、「五感でたのしむ」「素材にふれる」「コミュニケーションがはじまる」いずれかのテーマに沿った公開制作やワークショップを通して空間をつくり上げていく、参加・体験型のアーティストプロジェクトです。

第13回は、写真家の黒田菜月さんをお招きし、野鳥観察をきっかけに「見る」ことを考えるプロジェクトを開催しました。会期中は、「観察係」と「記録係」に分かれて鳥を見るという少し変わった野鳥観察の手法をベースに、映像作品の展示のほか、野鳥観察を体験できるワークショップなどを展開。分業制の野鳥観察は、視覚を共有する喜びや難しさを浮かび上がらせ、新たなかたちのコミュニケーションを生み出しました。



野鳥観察日和



野鳥観察日和を振り返る

問いを立てる／遠隔で見ることを
ドローンの「見る」に関心が膨らんでいた。知人にドローン運転の資格を取る人も増え、ドローンが身近になった頃だった。ドローンは遠隔操作で自分がその場になくとも見ることを可能にする。そしてそれは時に攻撃の道具にもなる。そこに自分が見たという実感は生まれるのだろうか。

野鳥観察にハマったのは、双眼鏡というアイテムを得たことが大きい。遠くの小さな鳥が双眼鏡を覗けばぐっと近づいて見える。鳥がレンズの中に入る瞬間は(たとえ鳥を手に入れなくても)見ることで心が満たされる。それは何かに出会った時、この瞬間を留めたいとシャッターを切るような気持ちにも似ていた。

コロナ禍で外出が難しかった頃、東京港野鳥公園のウェブページ上にあるライブカメラで自宅から鳥を観察した。ライブカメラにアクセスすると、公園の池に設置してあるカメラを遠隔操作して池にいる鳥を24時間探すことができた。やや古い仕組みのそのウェブページは、制限時間がくると別の人にアクセス権が移行してしまう。私が画面左で休んでいるコサギを見ていたとしても、突然映像が右手に振られて、岸で固まっているカモたちに視点が移動する。その場所になくても鳥を見られる喜びと同時に、私とは別の意思を持った他者の存在を感じることができた。ドローンの「見る」から発した問いは、その延長線上にある(対極にあるとも言える)野鳥観察へと移行していった。



枠組みづくり／野鳥観察を二手に分けてみる

野鳥観察を遠隔で行うことは可能か。また、その過程でどんな感情を抱き、工夫が行われるのか。そうしたことを細かく知りたくて、野鳥観察を「観察係」と「記録係」に分けて行うプレワークショップを企画した。そして会期中にその枠組みを何度も実践しようと考えた。

5月に行った撮影兼プレワークショップには年齢も専門もバラバラの6名が参加した。野鳥観察を初めて行う人も多く、記録係は苦戦したようにみえたものの、それぞれの役割を通して振り返る時間では、「同じ場所にいる鳥が鮮やかに認識できた」と、驚く声が上がった。こうした発言を受け、困難な状況でも互いの声に耳を傾けながら観察記録を行えたことに安堵しつつ、この枠組みをどのように広げていくか課題が残った。

会期中の展示室には、プレワークショップの記録映像《鳥の名前を届ける》の上映と、トランシーバーで行われた観察係と記録係のやりとりの言葉、記録係のノート、タイムラインの一致した観察係と記録係の映像、記録係の音声だけが聞こえるヘッドフォン、未使用の記録用紙を置いた。来場者は、これらのアイテムを使って記録係を体験することができる。

記録用紙の使い方は来場者によってアレンジや工夫が加えられていた。例えば、まだ字が読めない子に代わって保護者が読み聞かせながら絵を描かせたり、教員だという来場者の方は、その場にいた家族にオリジナルのワークショップを開いていた。鑑賞教育プログラムで小中高生が団体で来場した際には、学芸員の庄子さんがテキストを読みあげて生徒たちとともに記録を行った。これらは作家が指示をしたわけではなく、枠組みを理解しながらも、状況に応じて各自が工夫を施して改変されたものだった。

また、記録撮影者の立場で観察していた写真家の西澤諭志さんは、会場内の印象について「来場者それぞれが何かを見よう。としており、同時に複数のイベントが発生していた」と話した。ここで言う何かは必ずしも展示物というわけではない。



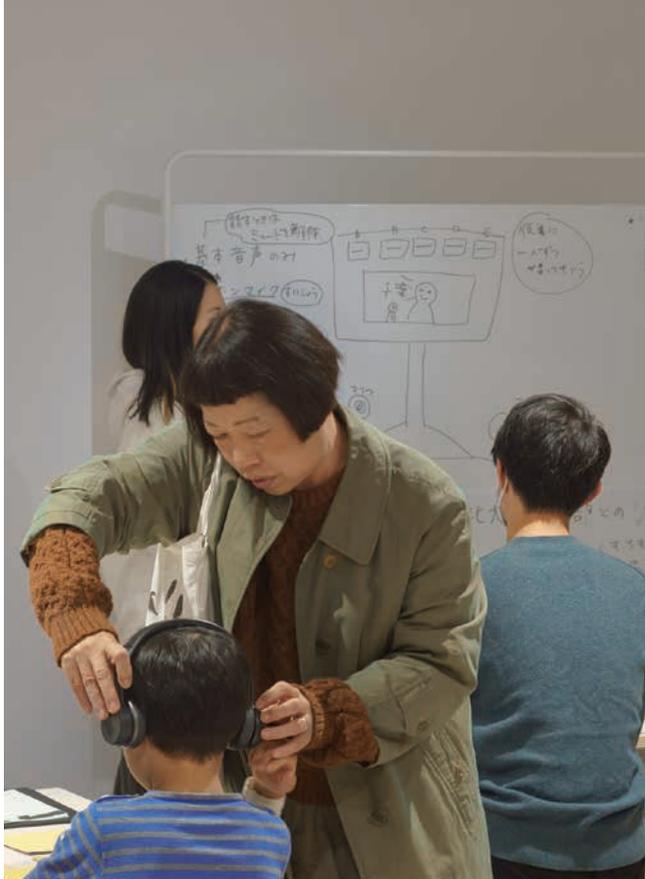
観察者からの応答／名前を剥がしてみる

体験する／見る人の出自によってプロジェクトが拡大されていくように感じたのは、東北大学 野鳥の会で行ったワークショップにおいてである。12月3日に行った「鳥の名前を届ける—おためし篇—」では、千葉市美術館と東北大学 野鳥の会の方々をZoomで繋ぎ、観察記録を行った。彼らは毎週「土曜探鳥」を開いて野鳥観察を行っているが、今回は普段のフィールドワークに加え、海岸や沼にも足を運んでくれた。美術館で記録係を担当した私たちは、1日室内にいたにもかかわらず、行ったことのない団地や海の光景を思い起こした。庄子さんは「ずっと肌寒さのようなものを感じた」と表現していた。観察終了後に行った意見交換では、日常的に鳥を観察する人々の視点／視線を通してワークショップを批評してもらえたようだった。中でも特に印象的だったのは以下の内容である。

「観察する人と記録する人が同じ場にはいないので、名前を言わないというルールもあったので、(中略)色々なものに付けられている「名前」って、人によって漠然としたイメージがあって、それぞれにちょっとした違いはあれど、あまり支障は出ないから、だから我々は情報を共有して生きているんだという感じがして、
*(観察の報告が) 一方的な情報発信にはならず、双方向のやりとりがあった。そして消費も一つの生産のような印象をもった。」

その鳥から名前を剥がしてみると、各々が見ていたものには少しずつ違いがあることに気づく。そして後者のコメントは、観察報告は情報として一方的に消費されるものではなく、お互いのやりとりによって新たに立ち上がるもの(生産)があると教えてくれた。

離れた場所にいる、見知らぬ誰かの声に想像をめぐらせる。その過程はただ情報を受け取る「受け身」の状態ではなく、能動的な活動が含まれていると気づく。想像することの中に他者の存在があることが、なにか、考え事やイメージをする際に重要なことではないか。彼らの指摘はそのような考えを促してくれるようなものだった。では、能動的な活動とは何だったのだろう。



さ 会期の最終日、グリラ的に観察記録を行った。その日、群馬県のどある公園でフィールドワークをしていた写真家の山口梓沙さんと会場をインスタライブで繋いだ。山口さんは、翌日には取り壊されてしまう碑を見に行っていた。山口さんからの報告を元に会場にいた数名で記録を行った。碑はとても抽象的なものだった。私たちはそれを実際に見てはいないが、自分の中にそれを立ち上げるような実感があつた。もうこの碑を直接見ることはないけれど、新しく出会うような、そんな記憶を残すことができた。
黒田菜月(本展作家)



〈作家によるワークショップ・イベント〉

2023

5月21日(土)

プレワークショップ「鳥の名前を届ける——野鳥観察から“見る”を考える」

参加者数=6人 | 場所=習志野市谷津干潟自然観察センター | 協力=習志野市谷津干潟自然観察センター

10月29日(日)

オープニングイベント

「黒田さんといっしょに鑑賞会+トーク」

参加者数=16人

場所=千葉市美術館

登壇=黒田菜月、鈴木祐太、高橋祐志郎、橋本いぶ希、松浦開



11月12日(日)

公開制作「野鳥観察日和実験中 #1」



11月26日(日)

公開制作「野鳥観察日和実験中 #2」

12月3日(日)

ワークショップ「鳥の名前を届ける——おためし篇——」*詳細はpp.6-7で紹介

参加者数=36人 | 場所=千葉市美術館 | 協力=東北大学 野鳥の会

12月17日(日)

公開制作「野鳥観察日和実験中 #3」

2024

1月13日(土)

ワークショップ「鳥の名前を届ける——ひろがる篇——」*詳細はpp.8-9で紹介

参加者数=20人 | 場所=習志野市谷津干潟自然観察センター、千葉市美術館 | 協力=習志野市谷津干潟自然観察センター

1月20日(土)

東北大学 野鳥の会「土曜探鳥」参加

「鳥の名前を届ける——おためし篇——」

ふりかえり

参加者数=13人

場所=東北大学 川内キャンパスほか

協力=東北大学 野鳥の会



1月28日(日)

クロージングイベント

「鳥の名前を届ける——大ふりかえり篇——」

参加者数=13人

場所=千葉市美術館

登壇=黒田菜月、西澤諭志



〈オープンワークショップ〉

「野鳥観察ノート」会期中いつでも | 配布数=2,773人

「記録系の記録」会期中いつでも | 参加者数=362人

「野鳥観察ノート」は、こちらからご覧いただけます。



黒田菜月 | 野鳥観察日和 04 >> 05



やりとりが終わると、その鳥が何かを確認するために図鑑を広げて探す人の姿が見られました。記録用紙は《鳥の名前を届ける》でも使用したもので、罫線があるもの、白紙のもの、鳥のかたちがかかれていたり、好きな紙を選ぶことができます。(K)



2023年12月3日(日)
ワークショップ
「鳥の名前を届ける
——おためし篇——」

参加者数=36人
場所=千葉市美術館
協力=東北大学 野鳥の会

《鳥の名前を届ける》で試みた内容を発展させ、「さらに遠い場所の鳥を見る」ことを目指したワークショップ。東北大学野鳥の会の全面協力のもと、宮城と千葉でオンライン通話をつなぎ、仙台市、大崎市、東松島市の鳥の報告を受け、記録しました。「おためし篇」としたのは、来場者の方々にも分業制の野鳥観察を体験してもらうため。当日はだれでも自由に記録係を担うことができ、多くの人が野鳥の会の方々どコミュニケーションを重ね、冬の東北に暮らす鳥を想像し、思い思いの方法で記録を残しました。



大きなモニターにはZoomの画面が映っています。右にあるホワイトボードにはやりとりの手順が記されており、参加者はスピーカーから聞こえてくる声の主とやりとりを行い、1人あたり5分~10分近い時間をかけて記録を行いました。(黒田、以下K)



ワークショップは会場の外のスペースで開催しました。ワークショップに参加する人だけでなく、長い間やりとりを聞いている人たちも多数いました。観察係からの連絡がないときは、しばらく待機することもありましたが、「これから何かが始まりそう」と思わせる雰囲気会場に漂っていました。(K)

2024年1月13日(土)

ワークショップ

「鳥の名前を届ける —ひろがる篇—」

参加者数=20人

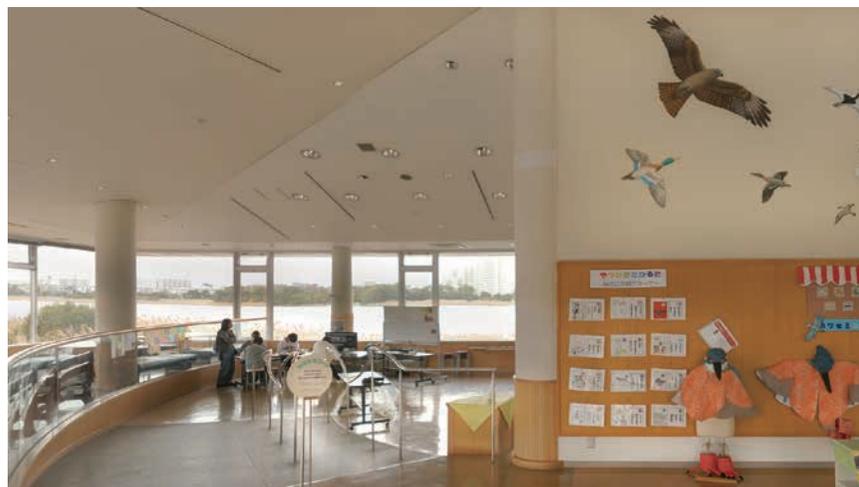
場所=習志野市谷津干潟自然観察センター、
千葉市美術館

協力=習志野市谷津干潟自然観察センター

プレワークショップと同じ会場の谷津干潟で、県内の高校生7人と行ったワークショップ。美術館の外へ飛び出して開催するので「ひろがる篇」。センターの全面協力のもと、オンライン通話を使い、観察係と記録係に分かれて野鳥観察を行いました。午前と午後で役割を入れ替えることで、たがいに伝えるべきことや聞くべきことを試行錯誤でき、回を重ねるごとにやりとりの密度が上がっていききました。また、オンライン通話を美術館で中継し、美術館でもやりとりの音声を聞けるようにしました。



センターの共有スペースにモニターやスピーカー機材を設置して記録を行いました。一般利用者もいる空間のため音量には気を遣いましたが、ご自身の観察を行いつつもスピーカーから聞こえる報告に反応し「ヒドリガモか……いや、違う」と声を漏らす方も見受けられました。飛び入りでの参加者もいました。(K)



写真の中心で観察している人は望遠鏡を使っています。また、その横で両手で構えている人は双眼鏡を使っています。高校生たちは野鳥観察は未経験だったため、これらの道具はセンターからお借りしました。レンジャーの方の指導のもと、使い方から鳥の見つけ方まで教えてもらいました。(K)



センターの建物は一面ガラス張りになっており、外を観察することができます。その中にモニターを据えて、見えない観察を行う様子は不思議な光景でした。(K)

企画のアイデア出しの過程で初期から明確にあがっていたキーワードは、写真を生業とする黒田さんだからこそ「見る」というものだった。それをどのようにプロジェクトに展開させるか、内容を練る時間が長く続いた。

「見る」ということは、あまりにも身近な行為である。健常者は、目を開いていればつねになにかが見えている。四六時中、視界は目の前に広がっている。そこに意識や意思を乗せることで、「見る」が「見つめる」になったり、「眺める」になったり、「覗く」になったりする。しかし考えてみれば、「見る」ということは、主体から対象へ発される一方的な行為だ。黒田さんがアイデアの源泉としていたドローンの使用例^{*}は、「見る」ことがはらむ一方通行性や危険性を端的にあらわしていた。

そのようなことを考えながら、最終的には、黒田さんが趣味にされていることもあり「野鳥観察」を大きな軸とすることとなった。しかし、ただ野鳥観察をするわけではない。黒田さんからは、野鳥観察を「観察係」と「記録係」にわけて行うという特殊な方法が提案された。観察係は屋外で鳥を観察し記録係に報告する。記録係は屋内で待機し観察係の報告を記録する。観察係は、自分が見たものを言語化する必要があり、記録係は、相手が見たものを想像する必要があった。これは、「見る」という一方的な行為の共有であり、解体であり、拡張であった。

この分業制の野鳥観察をワークショップとして展開し、さらに映像作品に向けて撮影するために、2023年5月21日に千葉県習志野市にある谷津干潟でプレワークショップ「鳥の名前を届ける――野鳥観察から“見る”を考える」を開催した。谷津干潟はラムサール条約登録湿地に認定されている干潟で、一年を通してさまざまな野鳥を観察することができる。公園の敷地内には習志野市谷津干潟自然観察センターがあり、今回はセンターの全面協力のもとワークショップを行った。そして、完成した映像作品は《鳥の名前を届ける》というタイトルで会場に展示され、「野鳥観察日和」のメインコンテンツとなった。

少し変わった野鳥観察の手法は、会期を通してワークショップのフォーマットとしても活用された。その大きな例が、ふたつのワークショップ「鳥の名前を届ける――おためし篇――」と「鳥の名前を届ける――ひろがる篇――」だ。

「おためし篇」では、黒田さんがSNSを通じて活動を知ったという東北大学 野鳥の会にはじめて声をかけた。鳥の特徴をとらえ、種を特定することが野鳥観察の肝であるため、プロフェッショナルである学生のみなさんの報告はどれも的確だった。美術館では、子どもから学生、大人までさまざまな参加者が入れ替わり立ち替わりで記録係となり、観察係にあまたの質問を投げかけ、記録を残した。

「ひろがる篇」は高校生と行ったが、じつは、最初に開催したプレワークショップもはじめは高校生を対象にしていた。しかし、時期の関係で叶わなかった経緯があり、リベンジの気持ちもこめた回だった。美術館スタッフの人脈をたどって高校にアプローチし、黒田さんもふくめた事前訪問を経てやっと実現することができた。本来想定していた対象に、ようやくこのプロジェクトを届けることができた。

「野鳥観察日和」では、とにかくさまざまなことを「実践」したと感じる。なにかに挑むような、なにかを試すような意識が、つねに頭のごどこかにあった。

展示やワークショップの枠組みについて言えば、さまざまな人や施設と、これまでのつくりかけラボにはなかった連携をとることができた。展示作品のためのプレワークショップ兼撮影を行ったり、館外の施設でワークショップを完結させたりなど、はじめて試みたことも多い。一方で、オープニング／クロージングイベント、公開制作など、ゆるやかで小さなイベントも開催した。ここでは、偶然居合わせた人とともに、その場で立ち上がる時間や感情を共有しながら場をつくることができた。

それでは、内容についてはどうか。振り返ってみると、結局はどれも「コミュニケーション」を起点としていたことがよくわかる。「見る」ことを問い直すために導入した分業制の野鳥観察のフォーマットは、はじめに目論んでいたように、「見る」の一方通行性を揺さぶり、「見る」を共有したり、解体したり、拡張したりすることを可能にしたと感じる。しかし、それ以前に、分業制の野鳥観察は必然的に(強制的に)濃密な対話をうながした。言葉の応酬によってイメージの輪郭が濃くなり、見えない鳥が見えるようになった。それは、突き詰めれば、日々のコミュニケーションにおいて話すこと／聞くこと大きな相違はない。相手にわかりやすいように伝え、相手の言わんとすることを汲み取る。そういった、日常生活や学校生活、暮らしや学び、個人や社会に接続する可能性も、この分業制の野鳥観察はたずさえていた。

だからこそ、クロージングイベントで黒田さんが行った試み^{*}は、「野鳥観察日和」を最後に意義づけるものとなった。コミュニケーションを土台として築き上げられた視覚は、不確かで、曖昧で、脆いものであったかもしれない。けれど、相手に伝えようと紡いだ言葉や、相手を理解しようと巡らせた想像は、自分ひとりでは見ることのできなかつた視界をもたらした。鳥を介した新たなコミュニケーションの実践によってこそ、「野鳥観察日和」は成り立っていた。

庄子真汀 (千葉県美術館学芸員)

(*いずれも pp.2-3 の黒田さんのテキストを参照。)



つくりかけラボ13

黒田菜月 | 野鳥観察日和

会期

2023年10月28日(土) - 2024年1月28日(日)

主催

千葉市美術館

協力

習志野市谷津干潟自然観察センター

東北大学 野鳥の会

会場設計

井上岳 (GROUP)

会場施工

稲永英俊

仁平祐也

横田剛

松浦開

システム制作

曾根貴了

グラフィックデザイン

三木俊一 (文京図案室)

作家滞在日

10月28日(土)、29日(日)、11月1日(木)、12日

(日)、26日(日)、29日(木)、12月3日(日)、4日

(月)、17日(日)、1月13日(土)、28日(日)

来場者数

3,977人

(大人2,940人、高校生以下1,037人)

「つくりかけラボ13

黒田菜月 | 野鳥観察日和」

報告書

執筆

黒田菜月

庄子真汀

撮影

西澤論志

黒田菜月

大中道彬浩

千葉市美術館

デザイン

三木俊一 (文京図案室)

表紙フォーマット

加藤賢策 (LABORATORIES)

印刷

吉原印刷株式会社

編集・発行

千葉市美術館

発行日

2024年6月14日